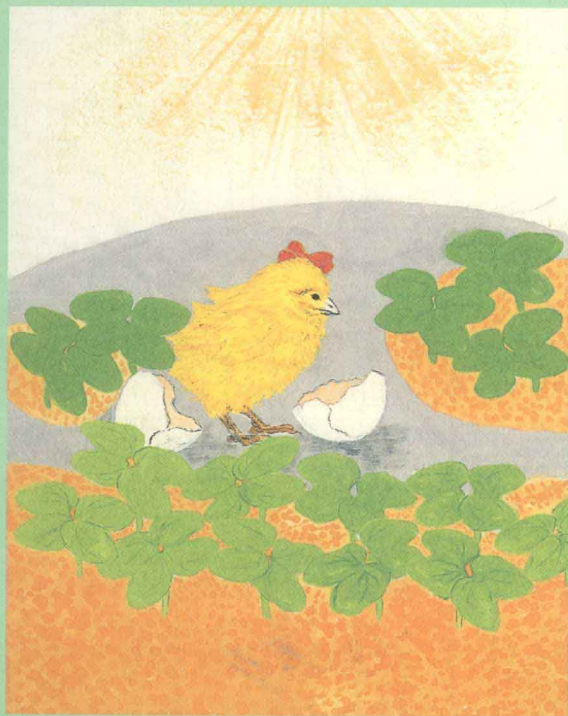
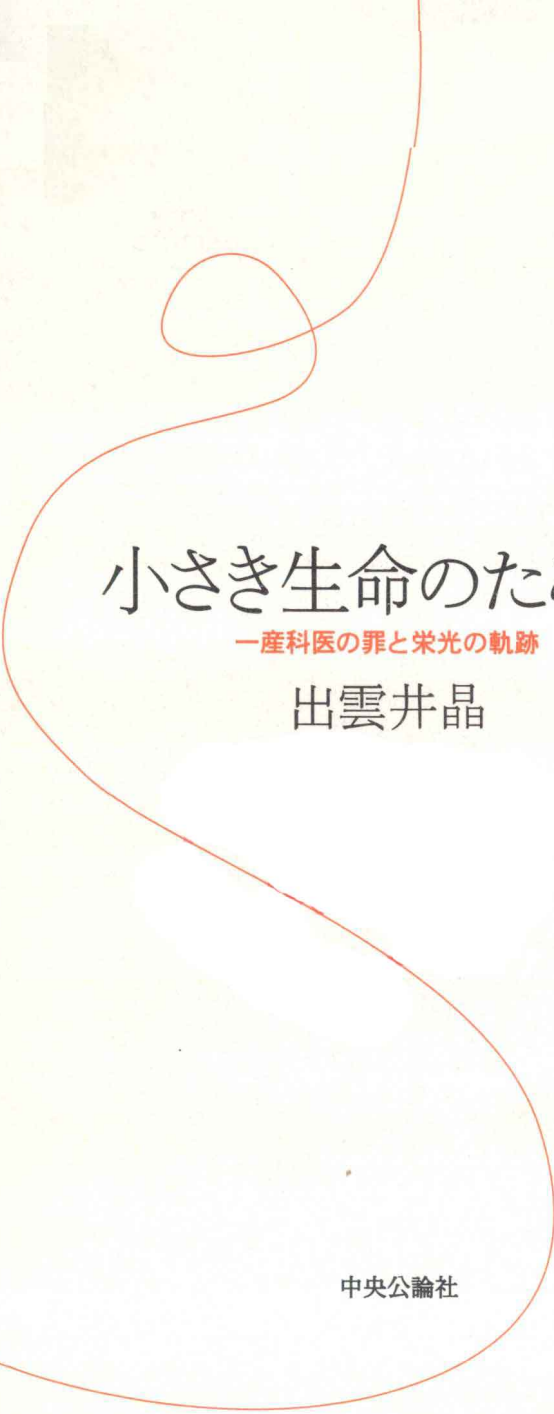


小さき生命のために

一産科医の罪と栄光の軌跡

出雲井晶





小さき生命のために

—産科医の罪と栄光の軌跡—

出雲井晶

中央公論社

小さき生命のために

——一産科医の罪と栄光の軌跡

©一九九四 検印廃止

一九九四年 二月一五月初版印刷
一九九四年 二月二五月初版発行

著 者 出雲井 晶

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替 東京二―三四

ISBN4-12-002294-3

Printed in Japan

小
さ
き
生
命
の
た
め
に
す
目
次

世界生命賞

7

子殺し子捨て人助け

27

青い目の聖者

50

大いなる賭け

72

国会証言

95

暗
転

121

告発された
愛^{ハハ}

147

ほのかな曙光

175

生と死のはざま

207

天国への招待

233

あとがき

252

カバー画・挿画 著 者
装幀 鈴木正道

小さき生命のために

—— 産科医の罪と栄光の軌跡

世界生命賞

1

へねねこせー ねねこや
寝ろでばや 寝ろでばや
寝えねえのか この餓鬼め

菊田昇きくたのぼるは思わず首をそらせて上を見あげた。お母ちゃんの声が聞こえた。あの東北の港町独特の、言葉は荒いが情感のこもった子守唄が、たしかに聞こえた。それは、世界生命賞授賞式がこれから始まろうとしている時だった。頭上のシャンデリアの灯が白い光芒こうぼうを放っていた。その灯の向こう薄暗がりに母の面輪おもわがよみがえってきた。唄声をはっきりと思いだしてきた。

「あなた、行きましょう」

大ホールの、前の客席に並んで坐っていた妻の保子は、さっきから気遣わしげな眼ざしを当てていたが、壇上にあがることをうながした。保子の声に菊田は我に返った。



立ちあがった拍子に、くらっと目の前が暗くなった。さりげないふうに保子はわきから菊田を支えた。周りの目を意識した菊田は堂々と歩こうと心は逸るが、体は空中を浮遊している頼りなさであった。それでいて足はおもりでもぶら下げたように重い。

歩一步と踏みだす重さが菊田には、今まで自分に科せられた罰の重さに思えた。同業の医師からの告発、優生保護法指定医の取消し、業務停止、罰金刑。国の司法最高の機関であるところからまで道ならぬ行為をしたと罰せられた。自分はいわば犯罪者なのだ。ひたいから、じっとり汗がにじんだ。

次つぎと追いうちをかけるような苛酷な処遇によるストレスが災いしたとは思いたくなかった。しかし結腸癌、その転移再発。今日も仙台の東北大学付属病院のベッドから起きだしてきた末期癌の患者なのだ。その人間がいま栄光への階段をのぼろうとしている。夢うつつの世界にいるような気がしてくる。

支えてくれている保子の手に力がこもった。壇上への階段に足をかけたのだ。夢ではない。現実なのだ。だとすれば、信仰を放さず自分を支えてくれた妻のおかげであり、母のおかげだ。まさしく神からの褒賞なのだ！ 菊田はふるえる足にぎゅっと力をこめた。

IRLF（国際生命尊重連盟）会長J・ウイルキー博士と、ミセス・ウイルキー博士が階段のところまで歩みより迎えてくれた。J・ウイルキーの大きな手と握手をかわした。ミセス・ウイルキーは足もとの覚束ない菊田を抱くようにして手をにぎってくれた。温かさが伝わってきた。母の手の温もりであった。二人は菊田を両がわから抱えるようにして壇中央につれていった。五

百余人の出席者はいっせいに拍手をおくった。菊田は、明るく熱いスポットライトの中に立っていた。拍手のしずまるのを待って会長は、壇上の椅子に菊田夫妻をかけさせると聴衆にむかった。「菊田昇博士の生命尊重の功績を讃えて、^{たた}『世界生命賞』が授与されます。今日の第二回国際会議に初めて出席された各国代表の方もおられますから申しますが、IRLFとは、一九八四年に創設された、国連の非政府機関（NGO）として承認された国際組織であります。本部はスイスのローザンヌにあり、現在は世界四十カ国の教育者、宗教家、自然科学者や医師と、様々な職業の人々によって組織され、年を追うごとに加盟国も人数もふえていております。世界会議第一回は昨年オスロで開かれました」

昨年（一九九〇年）、初の世界生命賞は、あの偉大な聖者マザー・テレサに授与されて、自分はその聖者について世界で二番目の栄与を授けられるのだ。熱いものが菊田の胸にこみあげてきた。「世界生命賞は、ローマ法王が推挙された、人道的に最高の権威と名誉ある賞であります。菊田博士は三十三年に及ぶ産婦人科医院の仕事の中で数百のいのちを救い、また博士が様々な困難と戦いながら力を尽くされ、目の目をみた実子特例法によって、これから先どれほど多くの闇に葬^{はうむ}られるはずのいのちが救われるか知れないのであります」

ウイルキー会長は大きな楯^{たて}をとりあげた。

「博士の偉大な功績を顕彰するために……」

あとは大ホールをとよもす拍手の音になった。ずっしりと重い楯を菊田は全身で受けとった。ウイルキー女史の賛助講演がはじまった。

「胎児の成長の事実が、どこの国でもあまり知られていません。医療技術のめざましい進歩で、母親の子宮の中にすんでいる胎児と研究者の交流ができるようになりました。その結果、胎児は母の体内にやどつて一カ月ごろからすでに、聞き、理解し、感じる一個の人格をもった存在であることがわかってきたのです。胎児は母親のリズミカルな心臓の鼓動を子守歌にきいて安心しながらも、六カ月をすぎると油断なく聞き耳を立てています。母親の感情をすばやく読みとって生きていく生きもの、人間の子なのです。だから親から待ち望まれて誕生する幸せな子どもには、この最先端の科学が常識のように応用されて、子育てはゼロ歳以前からだと言われています。情愛を注ぐことが何よりの栄養素だなどと、ヴィヴァルディやモーツァルトの音楽まで聞かせてもらい優遇されています。この物語を伝えることが私たちの使命です」

菊田には、ウィルキー女史が異国の婦人のように思えなかった。あの温顔が母のおもかげをよびおこしたのだ。そう思った途端に、ホール天井を突き抜けて天上界から射してきた太い一条の光が、菊田の頭上から足の爪先へと電気でも通るように走り抜けた気がした。

あつちに頭をぶつけ、こっちでこっぴどく叩かれても遮二無二^{しゃにむに}「実子特例法」制定にむけて立ち向かわずにおられなかった。それが意識の深いところに眠っていた幼児体験と今、太い光の綱でつながったのだ。

世間並みの産婦人科医として平凡に暮らしていれば、ひよつとすると癌にもならず、まだまだ楽しい人生が続いていたかも知れなかった。しかし、その道を選ばなかった。自分から大きな波を立てた。激しい渦^{うず}をおこし、その中で煉獄^{れんごく}の苦しみを味わう道をあえて進んだ。なぜ、なぜな

のか。

「小さいのちを救うために」を錦の御旗にしてきた。殺されるはずの子を生かし、不幸な母親も助けるために実子特例法が出来ることを希って」と命題もはっきりしているはずだったが、

「菊田は大バカだ。なぜ、あんなバカなことをする！」

と嗤う人たちの問いかけが、時おり菊田の心の中でも大きな疑問符をつけて頭をもたげることがあったのだ。それに今、天上から明快な答えが与えられたのだ。心の奥にもやもやとしていたものが嘘のように消えた。今までしてきたこと、いや自分を駆りたててやまなかったものは理屈ではなかった。幼い肌にじかに伝わってきた母の温もり、これこそ至上のものであった。自分が味わった、その温もりをこの世に生まれてくる子ら皆に味わわせてやりたい。いとも単純なことだったのだ。ウイルキー女史の声が母の声のように聞こえた。

「遠い歴史をふり返りますと、百年まえ、黒人は人間ではなかったのです。だから人権はないと憲法で奴隷を売買、殺す権利が認められていました。今日、同じことが繰り返されています。お分かりですか。人工妊娠中絶がそれです。現在の奴隷は胎児です。恐ろしいことです。この国には産むも産まないも女性の権利などとぶちあげる勇ましい女性もいるそうです。が、そのようにして選択されて生まれてきた子どもたちが大きくなった時、その両親がかつてやってきたことを、子どもたちが行わないと断言できるでしょうか。そのことに早く気づかないと、老人たちが重荷にされる日が来るのではないでしょうか」

「はつきりと、よく話して下さいました。私はミセス・ウイルキーの言われたことが、わが国のすべての女性に届くことを祈ります」

菊田はもう一度ウイルキー女史と握手をすると、五百余人の聴衆にむかつて謝辞をのべた。

「今日、胎児の人権宣言に立ちあえたことをうれしく思います。胎児のいのちが闇に葬られずに救われる運動が、これで飛躍的に前進し広がることを願います」

無量の思いが菊田の胸からあふれた。中絶をして金もうけをしていた時は、誰も道に反すると自分をそしりはしなかった。罪ほろぼしのために数百人のいのちを救った時に人々は、自分に tribute を投げつけた。世間の目は実に冷ややかなものであった。

今初めて、自分の行為は良いことだ、赤ちゃんのいのちを救ったことは人道にもとづくことだと認められたのだ。菊田は涙で目の前がかすんだ。また、母の子守唄が耳の底を流れた。

「おふくろ、ありがとう。おふくろのおかげで男のいのちを賭けた悔いのない仕事が出来ました。昇は幸せ者でした」

菊田は心の中で静かに母に語りかけた。

並みいる人々の目には、自若とした菊田の態度は、燃え尽きようとする殉教者の姿そのものに映った。数知れぬ小さないのちを守り抜いたあげく、長く苦しい道の果てによりやく高い評価をされて栄光に輝いた。が、それは彼の死が目前に迫った秋であらうとは……。しかも彼は、自らが天に還る日の近いことをはつきりと知りながら、なお親から望まれず生まれてくる子、哀れな母親たちの幸せだけを願っているではないか。

一瞬、しずまり返った場内を、どっと感動がひたした。また津波のように、だが人々はみな涙を流しながら手を叩いていた。

苦しい戦いのさ中の昭和六十一年十二月、菊田はS字状結腸に鶏卵大の癌があると告知された。師走の十五日、石巻^{いしのみ}日赤病院で金子外科部長の切除手術を受けた。それまで病氣らしい病氣をしたこともなかった彼は恢復も早く、一月五日には退院して翌日から仕事をこなしていた。

ところが昨年暮れごろから、左ひじを動かすと痛みが走るようになった。それまでは、術後の患者を軽がると一人で抱きあげて移動させていたのが、痛くて出来なくなった。もしか、と嫌な予感がした。石巻日赤病院の山梨院長に相談し検査をうけた。その結果、肝臓と骨の両方に転移があることがわかった。一月九日、東北大学付属病院に入院、二月十二日、肝臓の手術をうけた。このとき菊田は畑外科部長に、四月の末に重要な会議がある。それにはぜひ、上京したいのでよろしくと、依頼していたのだ。

周りからは出席も危ぶまれていた。が持ち前の気丈さで、菊田は顔一つしかめずに今朝病院を出た。「大丈夫」という足どりは、保子一人の介添えではとても心もとなかった。長男^{まさる}仰ときくた医院の村上婦長がにわかに同行しての上京であったのだ。

菊田は祝いをのべにくる一人ひとりと、ねんごろに別れの言葉をかわした。自分には、志を同じくするこの人々と、再び会う日は巡って来ないことを知っていた。

今日、ここに来るまでは死ねないという気負いがあった。だが今は、死とはすべての人に必ずおとずれる自然の営為だと有りのままに身を任せる気持ちになっていた。

後ろから見守る保子には昇の姿は、悠揚と安らぎに包まれてみえた。力の限りこの世でなすべきことのすべてを、なし終えた者だけが持つ安らぎであった。無理をしても同道してきてよかった。彼にとって今日の出来ごとは、烈しい嵐のあとの、西空を染めあげた真紅の夕焼けだと、保子は祝福していた。

平成三年四月二十七日、三日続いた会議の最終日の今日、もう一つ大きな意義のある行事があった。それは、人類最後の人権といわれている“胎児の人権宣言”が採択されたことだ。人間は一人ひとりが、母親の胎内で受精した瞬間からこの世で自然死を迎えるまで、人間としての尊厳と固有の価値をもっている、という宣言がなされたのである。

一見、人間として当たり前のことが事新しく、わざわざ宣言されなければならなかった事実がもつ意味と、それが日本でなされたことには、途方もなく大きく重いものがある。

2

会場を出ると、花ぐもりは高いビル街を遠くへ押しやって見えた。帰りの新幹線に乗り込んだ菊田は、陽炎かげろうのかなたにゆらぐ東京の街になごりを惜しむかのように車窓から、走り去る景色に目をやっていた。

やがて夕暮れてくる田園風景のなかに、水の面おもてをきらめかせて流れる春の川が目にはいった。菊田はとなりの保子に語りだした。